

第IV部門

近代伏見における濱の利用転換に関する研究

京都大学工学部地球工学科  
 京都大学大学院工学研究科  
 京都大学大学院工学研究科  
 京都大学大学院工学研究科  
 京都大学大学院工学研究科

学生員 ○村尾 有紀  
 学生員 林 倫子  
 正会員 山口 敬太  
 正会員 久保田 善明  
 正会員 川崎 雅史

1 はじめに

伏見には、宇治川派流、大阪へつながる宇治川、京都市街へつながる濠川と高瀬川が流れている。このような地勢的条件の下で、両都市の中継点として発展した伏見では、高瀬川が開鑿された近世から舟運が栄えていた。当時の河岸には、荷揚げや取引など、舟運において利用される「濱」が広がっていた。しかし、近代になるとそれらは宅地などに転換された。伏見の舟運に関する既往研究には、水系が都市形成や近代交通に及ぼした影響を明らかにするために、近世の水辺と近代舟運について明らかにした研究<sup>1)</sup>や、港湾と都市活動や都市形成の関係を検証するため、近世の舟運及び近代伏見港の変遷を明らかにした研究<sup>2)</sup>等があるが、濱及びその利用転換期に着目し、これらを明らかにした研究はない。現在の伏見の町は濱が利用転換された結果としての姿であり、その転換過程を明らかにすることは伏見の舟運及び都市について知る上で重要であると考えられる。

そこで本研究では、宇治川派流と濠川沿いの各町を対象に、旧公図、土地台帳を用いて河岸の土地利用の変遷を把握し、近代における濱の利用転換の様子を明らかにする。更に、『京伏合併記念伏見市誌』等の資料を読み解くことで、濱の転換がどのような意図で行われたのかを読み取ることが目的とする。

2 河岸の土地利用の変遷

2. 1 明治 31 年における河岸の土地利用

旧公図と土地台帳を用いて、1898（明治 31）年の河岸における土地利用図（図 1）を作成した。伏見では当時から行政区分けがされており、各区の濱に対する名前やそこで使用された舟の数や濱の大きさが明らかになっている<sup>3)</sup>（図 1 中表参照）。これによると、

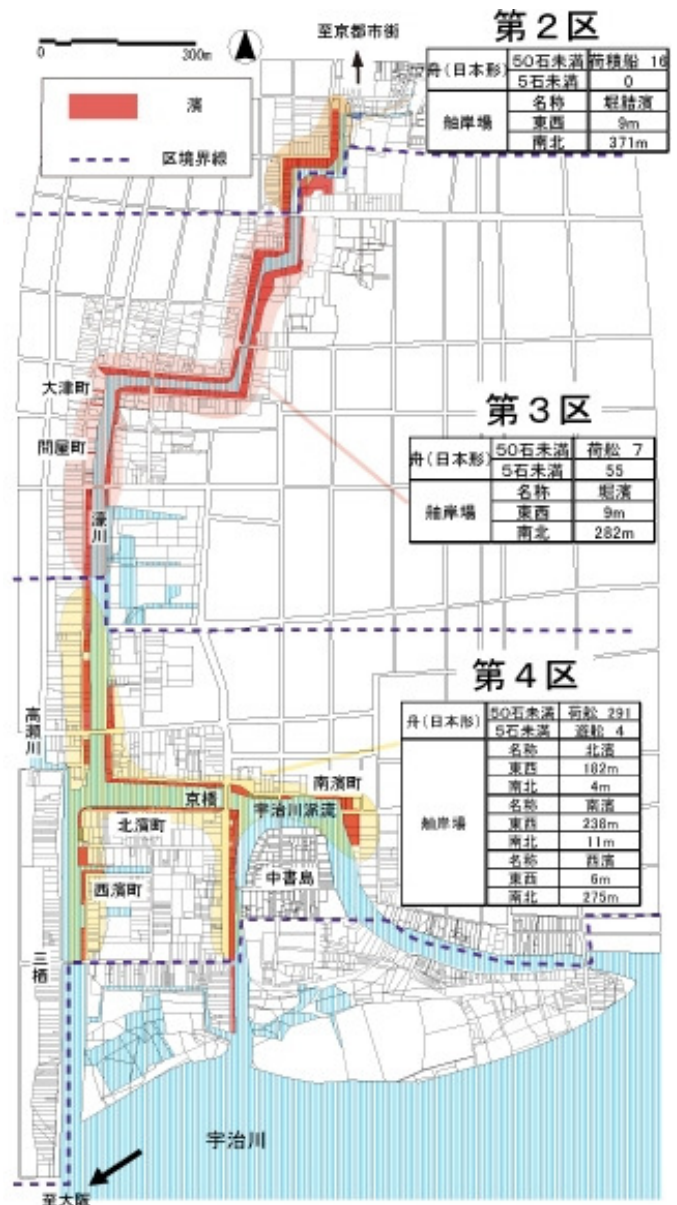


図 1 明治 31 年における河岸の土地利用

当時の伏見では河岸の大部分が濱として利用されていたことがわかる。第4区の河岸については、大半が濱ではあるが、三栖では道路、中書島は宅地として利用されていた。中書島において河岸が開放的な濱ではな

く宅地として利用されていたのは、1700（元禄 13）年より遊廓地として指定されていた中書島を、周囲の町から独立させるためであったと考えられる。第3区の間屋町や大津町の河岸には、宅地間に設けられた細い濱を確認できる。その幅の狭さから、これらの細い濱は、荷揚場ではなく、水汲みなどのために水辺に行くための通路として利用されたものと推測される。次に、各区で使用された舟に着目する。第2区では「荷積船」と書かれた大型船が利用されており、第4区の「荷船」とは区別して記述されていた。また第3区では小型船が主に利用されていた。第4区では、他区と比べると荷船数が多く、さらに遊船も利用されていることから、伏見における舟運の中心地であったことがわかる。

## 2. 2 昭和6年における濱の利用変換

土地台帳の読み取りにより、明治31年時点で河岸に広がっていた濱は、1931（昭和6）年に一気に宅地に利用転換されたことが明らかとなった。濠川沿いの大津町、間屋町の宅地間に通路状に設けられた濱は、1937（昭和12）年までに、順に道路や宅地へと転換された。これらを除く、濠川沿いの濱は、昭和6年時点で一気に宅地化された。一方、宇治川派流沿いの河岸については、西濱町等を除く濱のほぼ全てが、昭和6年の時点で宅地化された。更に、京橋や中書島周辺では、水面が埋め立てられ、新たに宅地が造成された。これらの宅地化は、後述の公有水面埋立工事による。

## 3 公有水面埋立工事にみる河川整備の意図

1930（昭和5）年に完了した公有水面埋立工事についてはその工事意図を示す資料が残されており、当時の伏見市がどのような構想の下に河岸整備を行ったのかを読み取ることができる。伏見市は、1929（昭和4）年の市制施行に伴い、「新興都市の面目を發揮すべく」<sup>4)</sup>、土木工事を中心とした様々な新計画をたてたが、中でも最も大きな事業が、公有水面埋立工事であった。本工事が実施されたのは宇治川派流沿いの河岸及び水面である（図2）。

当時の宇治川派流では、沿岸の土砂堆積によって護岸の景観が悪化しており、その景観を改善することは本工事の目的の1つであった。また、本工事による埋め立て地に関しては、周囲の土地利用及び交通の便などを考慮した上で、住宅地、商業地、舟運の営業地帯等の利用目的が、伏見市により指定されていた（図2中表参照）。長建寺から西柳病院にかけての埋立地は、江戸時代から遊廓地として利用されていた中書島の周囲に位置すること、また鉄道利用に便利であることから、商業地帯として指定された。その他、京橋から堀川合流点にかけては、かつてより舟運が栄えていたことと市電の駅に近く鉄道利用に便利であったことから、舟運の営業地帯として指定された。指定の結果、「公共的ノ物揚場トシテ京橋上下流ノ三箇所ニ階段ヲ設ケタル」<sup>5)</sup>とあるように、共同荷揚場として、3箇所の合計約100㎡の広さの物揚階段が設置された。

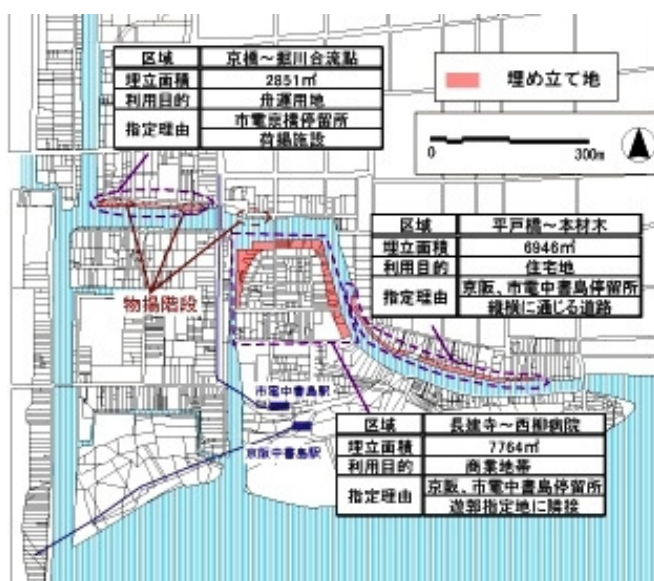


図2 公有水面埋立工事による埋め立て地

## 4 おわりに

本研究では、近代伏見における濱の利用転換の様子とその意図について明らかにした。明治31年において広範囲にわたり連続的に広がっていた濱は、昭和6年に一気に宅地化されたことが明らかになった。中でも、宇治川派流沿いの土地利用転換は、公有水面埋立工事にもなっているものであり、本工事は護岸景観の改善、宅地造成、舟運の利便性向上という3つの目的の下に行われたことが明らかになった。

<sup>1)</sup> 田中尚人：「水系基盤による近代京都の都市形成に関する研究」京大博士論文，2001。

<sup>2)</sup> 笠松明男，金井萬造，長尾義三：「日本最大の河川港湾伏見港の生成と衰退」第8回日本土木史研究発表会論文集，p.230-236，1988。

<sup>3)</sup> 京都府立総合資料館蔵：『京都府地誌 伏見区市街誌料』，1881。

<sup>4)</sup> 京伏合併記念会：「京伏合併記念伏見市誌」，p.174，1935

<sup>5)</sup> 京都府立総合資料館：「港湾施設調査ノ件」『港湾工事概要』，1940。